

水田農業の高収益化を地域で検討するために

- (1) はじめに 18
- (2) 第1部 高収益作物等の取組 22
- (3) 第2部 主穀・飼料作物等の取組 54

はじめに

1 地域の水田農業の将来像を念頭に

(1) 地域の水田の現状把握

水田農業の高収益化を検討する際には、「水田の利用形態」や「導入作物」からのアプローチが考えられます。

どちらからアプローチするとしても、「地域の水田農業の将来像」を念頭に置いて検討を進めるには、地域の水田の現状を把握し、用水路、排水路、ほ場の排水などの条件が畑作物等の作付けに適しているかどうかを確認する必要があります。

(2) 水田活用の直接支払交付金対象水田

将来にわたり収益性の高い水田農業を検討していくには、令和4年に示された水田活用の直接支払交付金対象水田の「5年水張ルール」にどのように対応するかが重要なポイントになります。

①交付対象水田から外し、畑地化する

②「5年水張ルール」を生かし、田畑輪換やブロックローテーション等で5年間に一度以上の水稻作を組み入れた作付け体系とする

③水稻作を継続する。

この検討に当たっては、個々の生産者の意向だけでなく、土地改良区、水利組合、農業委員会、土地所有者（借地の場合）、近隣耕作者などの関係者を交えた話し合いを行い、地域での合意形成を図ることで、具体的な導入作物も含めた地域の水田農業の将来像を明確にすることができます。

特に水利関係は、畑地化した場合の周辺農地への影響や灌水期の畑地への影響ばかりでなく、米粉用、飼料用の専用品種を導入する際の湛水時期など関係者の合意形成は不可欠です。

各地域の状況によりますが、市町村の「地域計画」策定やJAの「地域農業振興計画」の策定と連携し、市町村やJAと共通認識を持ちながら進めると効率的です。

2 導入作物の検討

導入作物の検討に当たっては、第1部「高収益作物」、第2部「主穀作等」に作物ごとの留意点や先行事例などを整理していますので参照してください。

3 排水対策等の検討

水稻以外の作物を導入するに際して、ほ場の地下水位の状況を把握するとともに、均平化、明渠・暗渠の施工など基本的な排水対策について検討します。

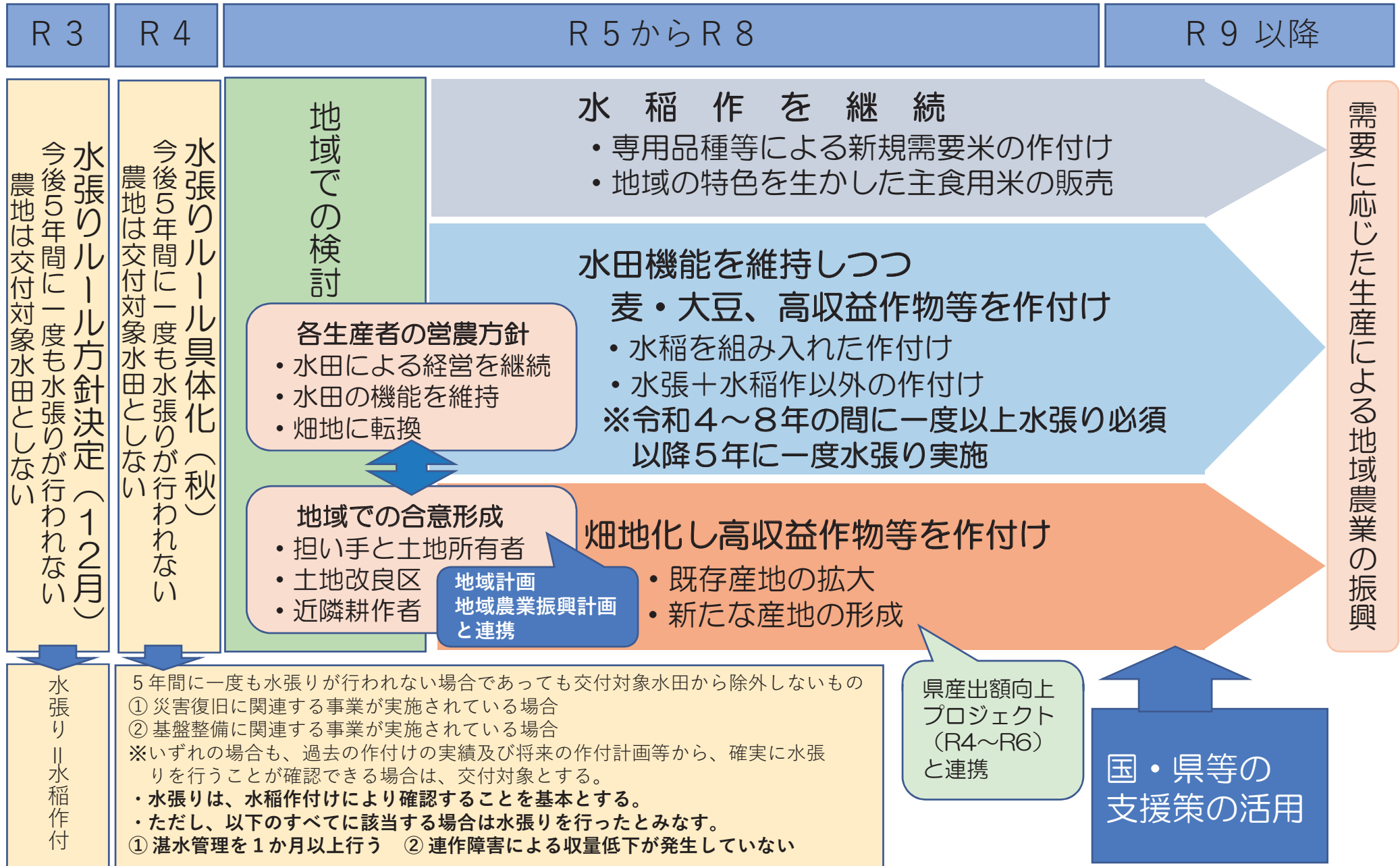
また、中長期的に用排水路整備、ほ場整備などの事業導入を検討します。

4 小規模な取組

地域での取組のほか、個々の生産者が畑作物等の作付けに適した水田を活用して小規模に取り組む場合は、地域での取組の先駆けとなるよう関係機関等で情報共有しながら進めましょう。

水張りルールへの対応について(R5.9.5版)

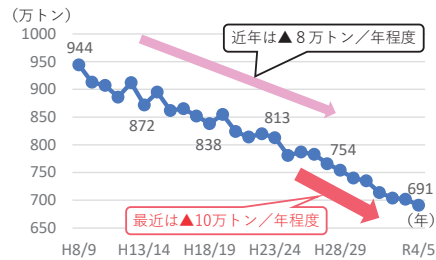
埼玉県農業再生協議会



水田農業の高収益化等の推進

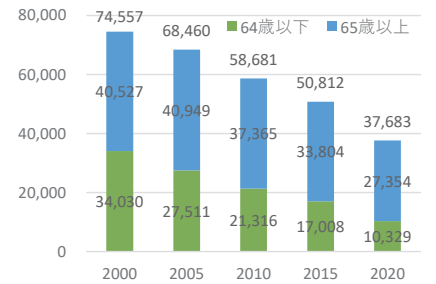
水田農業の現状と課題

○主食用米の需要量の推移



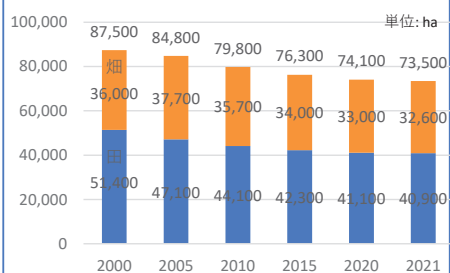
出典: 「米穀の需給及び価格の安定に関する基本指針」

○基幹的農業従事者数の推移



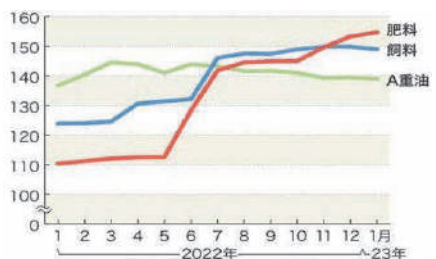
出典: 農林業センサス

○埼玉県の耕地面積の推移



出典: 農林業センサス

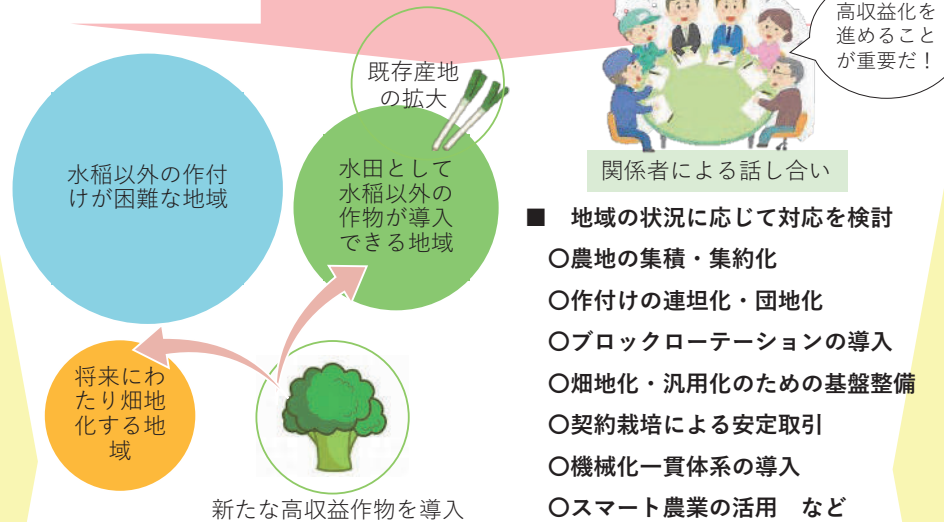
○農業生産資材指数の推移



※2020年の価格を100とした指数 (農水省の農業物価指数を基に作成)

令和4年度以降「水田活用の直接支払交付金」の見直し

- 新市場開拓米や地力増進作物(緑肥)への産地交付金の新設
- 拡大加算の廃止
- 対象となる水田の要件の厳格化と、新たな要件として5年間に一度の水稲作付(一定期間の水張りを含む)が提示
- 飼料用米の一般米の支援の令和6年度からの段階的引き下げ
- 畑地化支援事業の新設



地域の状況に応じて対応を検討

- 農地の集積・集約化
- 作付けの連坦化・団地化
- ブロックローテーションの導入
- 畑地化・汎用化のための基盤整備
- 契約栽培による安定取引
- 機械化一貫体系の導入
- スマート農業の活用 など

ほ場条件に合った作物を選定

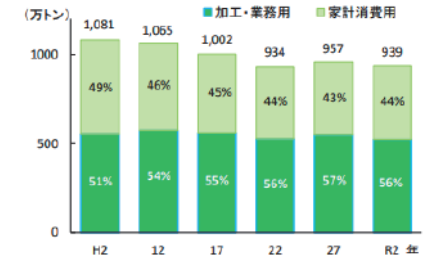
野菜 (推進品目)	特徴
ブロッコリー	比較的導入が容易
たまねぎ	需給バランスが安定
ねぎ	大規模化が比較的容易
えだまめ	8月までの出荷が有利
さといも	水田でも栽培し易い
カリフラワー	ブロッコリーから移行
トウモロコシ	消費需要が高い
なす	水田でも栽培し易い
にんにく	業務用を中心に需要増
じゃがいも	特に排水対策が必要

水稲	対応策
主食用	需要に応じた適正生産
米粉用	専用品種への移行
飼料用	専用品種への移行
加工用	大幅な需要増見込めない
新市場開拓用	アジア圏で回復
麦類	小麦: 需給均衡に近い状況
	ビール麦: 需要は横ばい、やや減
	六条大麦・はだか麦: 需要は堅調
大豆	基本的な栽培技術が不徹底
ごま	現状では国産需要は高い
ナタネ	徹底した湿害対策が必要
とうもろこし	子実用: 流通体制の確立が必要
	WCS用: 地域内流通の構築
牧草	粗飼料価格の高騰で需要はある。

野菜をめぐる情勢

加工・業務用割合が増加傾向で推移

○加工・業務用及び家計消費用の国内仕向け量



資料: 農林水産政策研究所、(株)流通研究所

加工・業務用需要が拡大、国産は7割

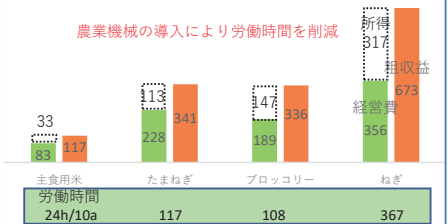
○加工・業務用需要等に占める国産割合

	H2	H12	H17	H22	H27	R2
加工・業務用	88%	74%	68%	70%	71%	68%
家計消費	99.5%	98%	98%	98%	98%	97%

資料: 農林水産政策研究所、(株)流通研究所

野菜は、手間が掛かるが所得が高い

○主食用米と露地野菜の所得比較 (千円/10a)



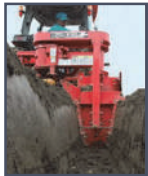
高収益化等を円滑に推進ために

【地表排水対策】



ほ場の均平

レーザーレベラーを使用し、1%（100mで高低差10cm）程度の傾斜均平を設ける。



明きよの施行

溝掘機等によりほ場周辺部を額縁状に掘る明きよは排水対策上最も重要であり、野菜栽培には必須である。



畝立て

うね間から排水させるとともに、野菜の作付け位置が高まることで、地下水位が相対的に低下する。

【ポイント】

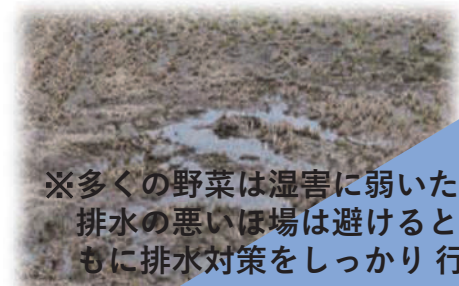
排水対策の徹底と省力・低コスト化の提案

【地下排水対策】

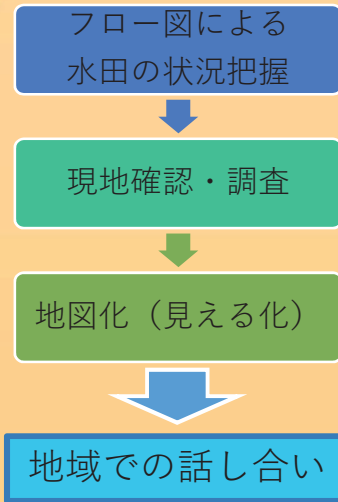


弾丸暗渠、心土破碎

本暗きよが施工されている場合、本きよと交差するように2~3mの間隔で、30cmの深さに施工する。



※多くの野菜は湿害に弱いため、排水の悪いほ場は避けるとともに排水対策をしっかりと行う。



高収益作物（野菜等）導入のリスク

- 主穀作と作業が競合し、管理できない。

機械化一貫体系の導入のリスク（スマート農機含む）

- 主穀作でも使う機械以外の野菜専用機械を装備するのは難しい。

補助事業の活用

レンタル・リースの活用

作業受託の活用



※個別経営→法人経営まで経営規模に応じた支援を実施

地域計画

JA地域農業振興計画

農地中間管理事業

• 高収益化等の選定

• 団地化やブロックローテーションの検討

• 地域での推進体制の構築